



オホーツク式土器

網走市・モヨロ貝塚出土

高さ 33cm、口径 21cm

「サハリン先住民の精神世界」について

7月21日から8月23日まで、第4回特別展「サハリン先住民の精神世界」を開催しました。

サハリンはその地理的位置から大陸や北海道と深い関わりをもち、周辺民族との交流が盛んにおこなわれてきた地域です。さまざまな文化が入り込む十字路として、北海道やアムール川流域に住む諸民族の歴史や文化を知るうえでたいへん重要なところといえます。

今回の特別展では、そのサハリンの先住民であるニブフ、ウイльта、アイヌの儀礼や信仰といった精神世界に焦点をあてました。これらの民族の共通性や違いをみるとともに、広く北方諸地域の民族と比較することは興味深いテーマの一つです。

展示は、シャマニズム、クマ送り、死者儀礼（葬制）、文様の4つのコーナーからなり、財団法人アイヌ民族博物館、市立旭川郷土博物館、資料館ジャッカ・ドフニおよび池上二良氏から借用した資料のほか、当博物館の収蔵資料をあわせ、122点から構成しました。このほか、関連する写真展示やビデオ上映を行いました。以下に概要を紹介します。

サハリン先住民は、狩猟、漁撈、採集あるいはトナカイ飼育をもとに生きてきました。自然のなかで生きていくために、動植物に関する豊富な知識をもつとともに、人間や動植物が生活する自

然界を支配している「超自然的な世界」と友好関係を保つ必要があると考えてきました。このような信仰から、共通する観念や儀礼、それに関する独特の用具が発達してきました。

シャマニズム

超自然的な世界と接触する方法の一つとして、「シャマン」がおこなう一連の宗教である「シャマニズム」があります。シャマンは特別な衣装を身につけ、太鼓をたたきながらトランス状態（忘我、恍惚のような異常心理状態）になり、予言や病気治療を行います。

今回は、当博物館収蔵のウイльтаの太鼓1点と各博物館から借用したサハリン・アイヌの太鼓をメインに展示しました。サハリン先住民のシャマンの太鼓は、楕円形で厚さが数センチ程度と薄く、トナカイの皮が張ってあります。太鼓とともに、シャマンの衣装（ウイльта）〔写真1〕、腰帶、幣冠などを紹介しました。



写真1：当館蔵

クマ送り

森林で狩猟をする民族の多くは、クマを動物の中でもっとも尊敬していました。山でクマを仕留めたときには、再び人間の世界にたくさんの動物を運んでくるようにと、特にクマの頭骨を丁寧に扱い、動物界を支配する《主》のもとにクマの霊を送ります。このようなクマ送りは、北方ユーラシアから北アメリカにかけての北方針葉樹林帯に住む、狩猟民に共通した重要な儀礼です。

サハリン・アイヌがクマ送りの際に使う、酒箸、刀掛帯、「イノカ」とよばれる木偶、シギ類の頭骨がついた幣冠、およびクマ送りの装束をつけたクマ〔写真2〕、またニブフの女性がクマ



送りの時に打ち鳴らす丸太の太鼓などを展示しました。

死者儀礼（葬制）

「死」は現実の世界から他界へ移ることであると考えられています。死にまつわる儀礼には、現実の世界を含めた広い意味での世界全体のあり方についての観念（世界観）があらわれています。

ニブフでは、人は短い現世のあと来世に移り住み、そこで最も長く生活すると信じられています。人が死ぬと、「ラフ」とよばれる^{はこ}祠を作り、その中に衣服を着せた「カク」という木偶をおき〔写真3〕、その前に櫛、手袋、靴など身に着けるものや木の実などを供えました。

このほか、サハリン・アイヌの墓標、棺およびその飾りの一部を展示しました。

文 様

身のまわりの生活用具や衣服にあらわれる文様は、民族に独特な美意識や精神世界をみる事ができるものの一つです。

ある地域で共通してもちいられる文様があることや、一つの民族がさまざまな文様をもつことから、周辺の人びとが使ってきた文様を巧みにとりいれてきた歴史をうかがい知ることができます。

今回は、白樺樹皮製容器、木皿、皿敷、財布、衣服などをおして、ニブフやウイльтаでは、渦巻きを基本にした左右対称の曲線文様がよくみら



写真2：
当館蔵

れること、アイヌでも渦巻き文様が使われますが、それとともに連続した括弧文様もよく用いられることを紹介しました。

ビデオ

当館に収蔵している記録映画『The Dream - time（アルチェリング；夢の時代）』（監督A. スラービンシュ、1982/90）から、サハリン先住民と文化的に多く共通している、アムール川流域にくらす諸民族の信仰や儀礼の様子を上映しました。内容は以下のとおりです。

- ・シャマン（ナーテイ）
- ・シャマン（ウデヘ）
- ・クマ送りで丸太の太鼓を打ち鳴らす様子（ウリチ）

最近の「サハリン・ブーム」も手伝ってか、大変多くの方々に本特別展をご覧いただきました。観覧者からは、「シャマンが実際に太鼓をたたいている様子が、ビデオでわかりとても参考になった」、「道内の博物館に所蔵されているシャマンの太鼓や木偶が一堂に展示されていて、比較ができた」などの感想が聞かれました。

（学芸課 佐々木 亨）



（左）写真3：市立旭川郷土博物館蔵

（右）写真4：ウイльта、ニブフでは、病気治療のお守りが数多く知られています。この資料には左から3つが腰巻、次が歯やあごの痛み、右が背骨の痛みに効く、5つのお守りと木偶が結ばれています。（資料館ジャッカ・ドフニ蔵）

北東アジアの民族形成の諸問題

— アレクセーエフの見解にもとづいて —

講師／創価大学教授 加藤 九祚 氏

7月26日の講演会では、各民族の特徴と大きなかわりをもつ民族形成の問題のなかでも、とくに複雑な要素を含む北東アジアについて加藤九祚氏を講師にお迎えし、ご講演いただきました。

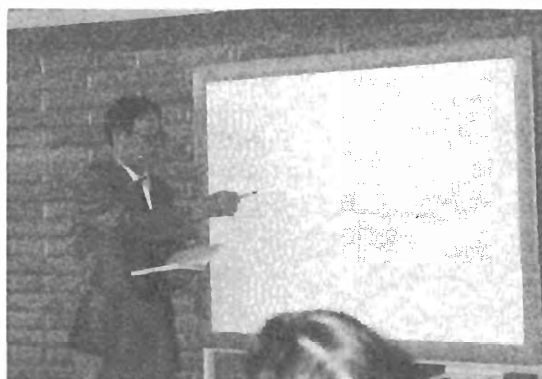
加藤氏は、はじめに“民族”について、最近出版されたL. グミリョフの見解をご紹介され、さらに本題のアレクセーエフの見解にもとづいた北東アジアの民族形成の概要を述べられました。以下にその要旨を紹介します。

民族の定義—L. グミリョフの見解

シベリアといえども南と文化的に深いつながりをもっている。トルコ系の民族やモンゴル系民族の分布を考えても、文化の重なりを考える必要がある。最近、L. グミリョフの著作「民族形成と生物空間」（1987年刊）、「歴史期における民族地理学」（1990年刊）に興味をもつようになった。グミリョフは民族（エトノス）とは人類が生きるためのひとつの“かたち”であり、さまざまな例をあげて、民族も人生に死があつて新たな生命が生れ、成長するのと同じように、ひとつの民族が減び、Aという民族とBという民族の接点から新たな民族が生れると述べている。さらに、彼は「民族がエネルギーを爆発させるのは、自然からエネルギーを吸収して、蓄積したときに起きる。今、地球上でエネルギーをうまく吸収できなくなっており、バランスが崩れつつある。」と、さまざまな研究者の業績をもとに人類に対する警鐘を鳴らすとともに、エトノスこそが歴史を動かす根源であると述べている。

北東アジアの民族形成

昨年亡くなったV. P. アレクセーエフは形質人類学を学び、民族の類縁関係を調査してきた。シベリア諸民族は基本的には北方系モンゴロイドであるが、トルコ、モンゴルを中心とする内陸アジア型、バイカル湖を中心とするバイカル型と北のチュクチ、コリヤーク、エスキモーという北方型とに大きく分けられる。こういった要素がどれくらい混ざり合っているかが問題になる。



大きなスケールでみると、遠い昔はヨーロッパ系の波がアジアに及び、また紀元5世紀くらいからモンゴロイドが西の方へ広がっている。細かい流れでみると、同じ地域でもある時期には西が強く、またある時期には東が強いというように交替がみられる。したがってウラルから東の方の民族を考えると、いくつかのポイントがある。旧ソ連アジア地域の起源を共通にする諸民族の地域は図のように分けられる。

これら諸地域の住民の相互の民族起源関係、つまりユーロペオイドとモンゴロイドの要素間の相関関係は、過去5千年の間に、各地域においてしばしば変化し、この変化こそがソ連アジア地域の人類学的形成史の主要な内容をなしている。



図1 ソ連アジア地域の起源を共通にする諸民族の地域
1) 北カフカス、2) 南カフカス、3) 中央アジア北部、4) 中央アジア南部、5) 西シベリア、6) 内陸アジア、7) シベリア・アムール、8) チュコット・カムチャツカ・サハリン

○平成4年度第2回講座

海外のアイヌ民族資料

講師／東京国立博物館主任研究官 佐々木 利和 氏

夏の喧騒も一段落した9月6日、アメリカ合衆国での調査から帰国されたばかりの佐々木利和氏を迎え、今年度2回目の講座を開きました。

海外でのアイヌ民族資料調査の必要性を、アイヌ研究の現状と課題のなかからお話いただき、物質文化研究における博物館の役割にも触れられました。また、スライドでは国内で見ることのない貴重な資料の数々もご紹介いただきました。以下にその要旨を報告します。

まず、なぜ海外でアイヌ民族に関する資料を調査しなければならないのかというと、欧米には古くてデータの揃った資料が多いからである。19世紀から20世紀初頭にかけてヨーロッパ各地で熱心に行われた日本研究や、北米では明治以降の北海道開拓に寄与した学者などの遺産が各地の博物館に収められている。これらの調査によりアイヌ研究の体系を整えることができれば、十分に把握されていない日本国内のアイヌ資料研究にも貢献できるであろう。

シーボルトが収集した1万点におよぶ「日本文化」資料のなかには、アイヌの民具も多く含まれていた。これは、1837年オランダ政府に引き渡され、ライデンの国立民族学博物館に収蔵されている。また、各地で世界規模の博覧会が催されるようになり、日本からはアイヌの資料などが出品された経緯がある。そういった資料はいつ・どこで・だれが・使（作）ったかというデータがきちんと残されている場合が多い。

しかし、ただ資料の写真やデータがあれば良いかというと、実際に手にとってみないとわからないこともある。明りにかざして様々な方向から資料を見ると、鉛筆で薄く文字が記されているかもしれない。あるいは手触り、重さ、匂いなどから新たな情報が得られる可能性もある。欧米の博物館にとっても日本の研究者が来て、収蔵庫の片隅に眠っていた資料をひもといてくれるのは、互いのプラスになる。



博物館は物質研究のセンターともいえるが、学芸員の仕事のなかでも、収蔵している資料の情報を増やす事は重要な作業といって良い。しかし学芸員というのは経験（物を見る目）が重視される職業ではあるが、「経験」は他人と共有できるものでなく、広く学問研究に寄与するものではない。物質文化の研究では、年代や地域の尺度となる基準資料を見出し、そのデータを研究者が入手できる形—例えば目録—で残すことが重要である。

また、物質文化の研究は、文化史全体に貢献することができるものである。例えば、アイヌ文化に象徴的な漆器について考えてみると、木製の天目台の上に木製の椀を乗せる用い方をする。これは茶道など本州の文化には見られない利用であるが、どこに起源を求めればよいのか。椀の作りからは、13世紀に南部・浄法寺で生産された椀もあるとされているが、そのころアイヌへと伝わったルートなど興味深い問題があり、物質文化が文化史全体の解明の手掛かりとなるだろう。

後半は、サハリンのレタルペと呼ばれるイラクサから作られた服の襟に使われている中国産の絹布、刺繍の技法や糸、布の織目など染織史研究への課題や、平沢屏山のアイヌ絵についても年紀や落款のある物が日本より多くヨーロッパに存在することなど、国内で見ることのできない資料とその注目すべき点などをお話いただきました。そして、アイヌ研究のセンターを北海道にとの期待を最後に講義を終えられました。

○平成4年度第2回講習会

北方民族の玩具

講師／笹倉 いる美（当館学芸員）

当館常設展で展示しているイヌイトの「けん玉」と「うなり板」を復元して実際に使ってみようというのが、8月9日に行なった講習会でした。夏休みを家族旅行ですごしている人たちをまじえて、30数名が楽しいひとときを送ったようでした。

まず、けん玉ですが、私たちがふだん見なれているものは木製で、剣とボールが糸で結ばれているのですが、イヌイトのは少しちがっていてトナカイの角とひんでつくられています。これをまねて作るために用意されたのが、長さ15cmの丸棒と、6.5cmの塩化ビニール管、細ヒモです。作業といえるほどのことはなく、丸棒の中間あたりにヒモを結わえたときにズレないようにきざみを入れるだけのことでしたが、ふだんナイフをあまり使わない子どもたちは四苦八苦でした。あとは塩ビ管と丸棒をヒモでつないででき上りです。イヌイトがけん玉で遊んでいるシーンをビデオテープで見たりしたのですが、実際にやってみると手に持った棒の先に、ふり上げた塩ビ管はなかなか入ってくれませんでした。

つぎに挑戦したうなり板も展示資料はトナカイの角、ひんでできています。用意された材料はうすい板とテグスです。小片の縁にナイフでノコの歯状のきざみを入れるところから作業が始まりますが、これにも悪戦苦闘した受講生が多かったようです。きざみの入った木片をテグスにつなぐと、でき上りです。テグスを手にもってふり回すと、ブーンと低いうなり音を発します。これは音の大小はあっても、だれもが囁らすことができて満足気でした。



調査概報

川西オホーツク遺跡 発掘調査

6. 29～7. 25

オホーツク海沿岸の湧別町にある川西遺跡は、縄文文化とオホーツク文化の堅穴住居が混在する複合遺跡です。当館では、昨年引き続きこの遺跡において発掘調査をおこないました。6月下旬から7月にかけて、気候の比較的安定した時期を選んだのですが、あいにくオホーツク海高気圧の張り出しで、寒さにふるえながらの調査でした。

以下に、今回の調査概要をお知らせします。本年もオホーツク文化期の堅穴住居跡1か所を調査し、さらに昭和35年に米村喜男衛氏らが調査した住居跡にも試掘穴を設け、状況を確認することとしました。

まず、地表面では五角形のくぼみで、オホーツク文化期の堅穴と思えるところを調査対象に設定して掘りすすめました。ところが予想に反して、一辺5メートルほどの平面方形の縄文時代の住居跡でした。床、壁面には柱穴・かまど・炉などはみられず、遺物も流れ込んだと思われるものをのぞいて検出されませんでした。

つぎに米村氏らの調査した堅穴住居跡に設けたテストピットでは、部分的に床面まで掘り起こされているものの、保存状態が良好なことを把握したので、全体を掘りあげることにしました。その結果、床面の北半分には、遺物も残されていました。火災によって焼け落ちた住居だったことがわかりました。柱穴の配列とオホーツク文化の住居跡に一般的によくみられる溝の状態からは、3回ないし4回の拡張にともなう建て替えがあったことがうかがえます。住居にともなう遺物としては、上器が7個体と石鏃、骨製の有孔円盤などがあり、また壁ぎわには、動物の骨を集積したところもありました。この住居から延長した北西側の試掘溝では、黒色土に床をつくる、きわめて掘り込みの浅い堅穴住居があることがわかりました。これも火災にあっていると思われます。

（学芸員 青柳 文吉）

筑波大学助教授前田潮氏、札幌大学教授木村英明氏らが中心となって、先史文化に関する学術交流事業が日本とロシアとのあいだでおこなわれていますが、その研究発表の場として、去る8月13日、網走管内遠軽町においてシンポジウムがおこなわれました。

ロシアと日本の研究者が一堂に会して、オホーツク海沿岸の南半部に広がる先史文化である、オホーツク文化の成立にかかわる諸問題が討議されました。

ロシアからはサハリンにあるユジノサハリンスク教育大学教授ゴルビエフ氏をはじめ、同大学研究員ワシリエフスキー、プロトニコフ、サマリノの各氏、日本側からは、前田氏をはじめ奈良国立文化財研究所・白杵勲氏、枝幸町教育委員会・佐藤隆弘氏、常呂町教育委員会・武田修氏をパネラーに、研究の動向や最近の発掘調査についての報告がなされました。

「オホーツク文化圏の形成」

8. 13 於：遠軽

ゴルビエフ氏らロシアの研究者のほぼ一致した見解では、オホーツク文化の成立期をスサマ式土器の時期と考え、紀元前7世紀ころサハリンに現われるとしています。そして紀元前後に北海道に南下してきたものとしています。オホーツク文化の成立の時期については、日本の研究者の見解とはかけはなれたものとなっており、共通の概念を作る必要性が求められました。白杵氏は、サハリンのオホーツク文化がアムール川下流域にまで広がる時期があること、またオホーツク海の北西部沿岸にはサハリンとの結び付きが強いトカレフ文化の遺跡があることが紹介されました。

このほか縄文時代からオホーツク文化期、アイヌ文化期にかけてが層位的に確認された礼文町浜中2遺跡をはじめ、枝幸町目梨泊遺跡、常呂町常呂川河口遺跡、サハリンのスタロドブスコエ3遺跡、チェルコーバ1遺跡の概要がスライドをまじえて紹介されました。（学芸課 青柳 文吉）

「北海道の歴史と文化の形成に影響を与えたアイヌ文化について理解を深め、その保存を図っていくために、アイヌ民俗文化財業務に携わる専門職員等の資質の向上と養成を行なう」ことを目的に、平成4年度アイヌ民俗文化財専門職員等研修会が、北海道開拓記念館を会場に行なわれました。

●奈良大学・水野正好氏『文化財学をさぐる』考古遺物や古文書からかつての生活習俗を復元する手法について、事例を挙げながら紹介。●国立民族学博物館・太塚和義氏『アイヌ研究の現状と課題』アイヌの現在と、近年のアイヌ研究に触れ、今後の研究に対する姿勢を問う。●日本口承文芸学会・萩中美枝氏『ユーカラに生きた女たち』アイヌ語で夏は女季とよぶ。アイヌ女性の明るく生きてきたことを紹介。●北海学園大学・藤村久和氏『アイヌ文化—これだけは知ってもらいたいパート2』アイヌの民具のなかでは儀礼具が多く残されている。この儀礼具を通してアイヌ文化を紹介

アイヌ民俗文化財専門職員等研修会

9. 9～11 於：札幌

介する場合の留意点について。●アイヌ無形文化伝承保存会・荒井和子氏『アイヌ民族の生活文化—私のあゆんだ道—』アイヌに生まれ教育者としてあゆんだ半生について語る。●武蔵野美術大学美術資料図書館・工藤員功氏『民具研究に於ける民具実測図について』民具研究の一手段として民具を実測し図を描くことが重要であるといわれている。民具の図化について講習。●北海道埋蔵文化財センター・森田知忠氏、田口尚氏『アイヌ期の埋蔵文化財について』アイヌ期の千歳市美々8遺跡について。●北海道開拓記念館・関秀志氏、中田幹雄氏『北海道開拓記念館の新常設展示について』開館20年を期に常設展示の全面改定をおこなった北海道開拓記念館で、アイヌの歴史と文化をどのように扱っているかを展示室内で説明。

（学芸課 笹倉 いる美）

「環オホーツク圏」という視野で図書館・博物館活動を続けている紋別市で、サハリンやシベリアの民族と文献資料の情報提供を目的に、湘南国際女子短期大学荻原眞子氏とサッポロ堂書店店主の石原誠氏の講演会が催されました。図書館および博物館友の会の会員や、郷土史研究会など多くの市民グループの方々の参加で大変盛況でした。以下に講演の内容を紹介します。

石原氏は本州や沖縄での生活の後、十余年前に故郷北海道に戻り札幌に古書店を開店なさいましたが、海に囲まれた日本の北方・北海道はシベリア、サハリン、カムチャツカなどの南側にあたるという視点で文献を集めておられます。目録などの資料を提示しながら、まずシベリア関係の古書への興味、本の交換などによるサハリンとの交流などご自身の体験を語られ、古書店業の醍醐味や最近の動向など普段うかがうことのできないお話も披露されました。

紋別市立図書館開館三周年記念講演会

9. 26 於：紋別

荻原氏は、「オホーツクの南と北 ―神話・伝承とシャマニズムを中心として―」というテーマで、アムール・サハリン地域から北太平洋全域にと研究対象を広げた経緯を述べられ、これら地域の先住民の文化を紹介されました。神話・伝承からは、射日神話や兄妹始祖神話など共通する内容とその分布によって、民族の移動や文化的な接触をうかがい知ることができ、「ヒトと動物」をめぐる話や至高神と創造神・文化英雄のモチーフにもまた彼らの自然観が表れていると話されました。また、シャマンの在り方や用いる道具の地域差にも触れられました。最後に、環オホーツクの民族文化の全体像のなかでアイヌ文化をどう捉えるか、アイヌの口承文芸や物質文化研究など、地元北海道への期待もこめて、2時間にわたる講演を終えられました。(学芸課 齋藤 玲子)

'92.11月～'93.3月の行事

- ・ 11/12, 13 第7回北方民族文化シンポジウム
「北方の精神文化における動物」
*詳細は次頁を御覧ください。
- ・ 11/29 第4回講習会
「北方の口琴の源流をもとめて
～ムックリはどこからきたか」
講師 直川 礼緒 氏(日本口琴協会)
- ・ 12/20 第3回講座
「北方の櫓とかんじき」
講師 渡部 裕(当館学芸員)
- ・ 1/10 第4回講座
「中・高生のための博物館学講座」
講師 青柳 文吉(当館学芸員)
*午前10時30分から午後2時30分まで行います
ので昼食を持参して下さい。
- ・ 1/31 第5回講習会
「挑戦! イグルー(雪の家)作り」
講師 佐々木 亨(当館学芸員)
*午後1時から講堂で説明後、野外駐車場でイグルーを作ります。
- ・ 2/9～3/21 第5回特別展
「メソアメリカの古代文明 マヤ」
*特別展は別途観覧料を申し受けます。
- ・ 2/21 第2回講演会
「新大陸の古代文明と人々」
講師 大貫 良夫 氏(東京大学)
- ・ 3/14 第5回講座
「アイヌ考古学」
講師 宇田川 洋 氏(東京大学)

1/10の講座および1/31の講習会を除いて、講演会、講座、講習会はいずれも午後2時から当館講堂にて開催します。参加はすべて無料です。内容の詳細やお申し込みについては、博物館まで電話でお問い合わせください。

Q

土器の底の形は、とがっているもの、平たいもの、台がついているものなどさまざまですが、用途や作られた時期などが違うのでしょうか。

A 土器を形のうえから分類してみることにします。壺形・鉢形・皿形・砲弾形などさまざまです。このとき口のあたりや底の形のちがいが、分けるときの大きな目安になりますね。土器は容器として、また煮炊きの道具として使われてきました。壺形・鉢形・砲弾形の土器はどちらの役目も持っていたようです。表紙写真にあるオホーツク式土器は、煮こぼれが炭化物となって付着しています。ときにはこのような土器が儀式に使用されたり、死者へのお供えであったりもします。いまの私たちの日常生活に照らして用途を推定できるものもありますが、当時の人びとがどのように使ったかというのは形からだけでは判断が難しいといえます。また、この土器などはいつごろ使われていたのかが分からない場合が多いのです。そ

こで研究者はたくさんの土器を、形や文様、仕上げ法、焼け具合などから、いくつかに分類しさらに遺跡での状態を加味して時間順にならべて、物差しを作ります。これに照らして分からない土器の時期を決めてゆくわけですから、形から時期が分かるものもありますが、それだけでは特定しにくいものの方が多いといえます。

(学芸課 青柳 文吉)

Q

展示室内のモニターで見られる映像は、いつ頃の生活を記録したものなのですか。

A 常設展示の各コーナーで流している映像については、多くの観覧者から質問を受けます。室内に音が氾濫しないよう2つのモニターを除いて無声で、3分弱の映像をエンドレスで御覧いただいています。展示している資料の使い方や生き生きとした暮らしぶりをお伝えするため役立っていると思います。

12か所のモニター全体では、30本以上の作品(資料)から展示

コーナーにあった場面を抜き出して編集していますので、ひとくちにいつ頃とは言えませんが、モノクロの古い映像は1920~30年代のものを含んでいます。これらは民族学の夜明けともいえるべき時代に撮影されたもので、数少ない記録です。またカラーフィルムになってからは、1960年代後半にカナダ極北地域のイヌイトのグループであるネツリックの人びとの協力で伝統的な生活を再現したシリーズが、学術的な考証もされておりさまざまな活動について手段が詳細に記録されているため、当館でも多くのモニターで使用しました。新しいものでは、1970~80年代のものもありますが、北欧やシベリアのトナカイ遊牧民は比較的伝統的な暮らしを残しているといえるでしょう。

現在は多くの地域で定住化が進み、動物の減少や機械の導入などによって生業が変化し、衣類や食事なども欧米化していますので、これらの映像は貴重な資料となっています。

(学芸課 齋藤 玲子)

第7回北方民族文化シンポジウムのお知らせ

■講演会『サハリン・ポロナイ川のカヌー探検の旅から』 講師：岡村 隆 氏(作家)

日 時：11月10日(火) 午後6時30分から

会 場：網走セントラルホテル(網走市南2条西3丁目)

■シンポジウム『北方の精神文化における動物』

狩猟・漁撈・トナカイ飼育などの生業によって、厳しい自然環境のもとで生活してきた人びとが、広く共通する精神文化として発達させてきたシャマニズムや動物儀礼など、さまざまな“かたち”であらわれる動物について比較検討し、北方諸民族のもつ自然観や世界観などをあきらかにします。

パネラー：W. W. フィッツュー氏(アメリカ合衆国・スミソニアン協会)

U. ドゥロビーン氏(スウェーデン・ストックホルム大学)

Z. P. ソコロヴァ氏(ロシア共和国・モスクワ民族学研究所) 他、国内より6名

日 時：11月12日(木)、13日(金)ともに午前9時30分から 会 場：網走セントラルホテル

いずれも入場は無料です。詳細とお申し込みについては当館にお問い合わせください。

執筆者ならびに出版社から 贈呈をうけた書籍(7月～9月)

クライトナー、G.『東洋紀行1』 大林
太良監修、小谷裕幸、森田明訳 平凡
社 1992

芸術教育研究所編『伝承遊び事典』
黎明書房 1985

樋口敬二『旅でみた家』 樋口敬二先
生退官記念事業会 1991

主な来館者

7/9 東京女子大学名誉教授・猿谷要
氏ご夫妻

7/23 市立旭川郷土博物館引地義夫係
長、齋藤建二学芸員

7/29 菊池徹夫氏(早稲田大学教授)

8/1 花井正光氏(文化庁文化財調査
官)

8/6 アイス民族博物館村木美幸学芸
員、児玉マリ特別研究員

9/3 加藤秀弘氏(水産庁遠洋水産研
究所)

9/5 V.D.フェドロチュク氏(ポロナ
イスク市歴史民族博物館長)、
V.V.ペレスラフツェフ氏(サハ
リン・テレビラジオ放送会社)

9/11 国学院大学博物館実習一行39名



猿谷ご夫妻と

観覧者動向 7月～9月

	常設展示	特別展示
7月	7,754名	1,327名
8月	8,480名	4,122名
9月	7,652名	-

第4回特別展の総観覧者数は5,449名
でした。

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (7月～9月)

7/7 網走の小野さん自費で「西蝦夷
地地名附」解説書出版/AB

7/23 「アイヌ・フォークロア」地方出
版文化功労賞に、旭川の魚井さ
んが翻訳/D(タ)

7/23 当時をしのぶ日誌も 帯広百年
記念館・武田四郎がみたトカチ展
/D(タ)

7/26 アイス民族と日口交流探れ・北
海道、東北史研究会根室でシン
ポジウム/D

7/28 ムックリの響きCDに、幕別の安
東さん「次代に伝えたい」/D

7/30 ユーカラ、仏で翻訳出版へ・作
家の津島さんら秋から作業入り
/D

7/30 山田秀三さんの足跡しのぶ・
100人参列、厳かに通夜/D

8/2 道立帯広美術館・子ども預けゆ
っくり鑑賞を15、22日託児室を
設置し紙版画手はどきも/AS

8/2 作ってみました「ユッケリ」ア
イス民族の防寒靴・旭川竜谷高
郷土部・杉村さんの指導で/M

8/6 サハリンにアザラシ大上陸地
少数民族は生活の糧に 調査に
参加の美幌博物館・宇野さんに
聞く/D

8/18 「コタンに生きる・夏」連載開始
/AS

8/18 アイス新法など学習 札幌で教
師ら150人が集会/M

8/18 国際太平洋大学の設立へ北太平
洋圏の国境を超えた交流に意義ロ
シア・マダガスカル改革期に施設メ
ド/D(タ)

8/19 「ダイヤの国・ロシア極北サハの
夏」連載開始/D

8/23 明治・大正の本道が見える北大

図書刊行会貴重な写真集を発刊
/D

9/1 アイス語のビデオ教本発行・萱
野さんが監修、出演/D(タ)

9/5 北方交易史に光・道開拓記念館
「蝦夷鐘」を学術調査/D

9/22 縄文時代しのんで 美幌みどりの
村・堅穴住居を復元/D

* AB 網走新聞

AS 朝日新聞(道東北網版)

D 北海道新聞(オホーツク版)

M 毎日新聞(道東北版)

◇職員の異動◇

退職 (7月15日付)

解説員 津田 雪香

採用 (7月16日付)

解説員 堀口 美穂

編集後記

知り合いの学芸員が、変わった石を
見つけては博物館に持ってくる小学生
たちに、たとえそれが石器でなくても
(そういう場合がほとんどだが)「歴
史的な大発見というのは、学者でなく、
君たちのような子どもであることが多
いんだよ。」と言って帰すのだと語っ
てくれたことがある。いい話だと思
い、ずっと頭の片隅に残っている。

先月から学校は第2土曜日が休みに
なったが、初めてのせいか諸々の行事
に「用意されすぎ」の感を持ったのは
私だけではあるまい。子どもの自主性
を高めるような、本当の意味での受け
入れを目指したい。(齋藤)